

## 英文法授業を改善するための一考察

### An attempt of improvements in English grammar class

杉内光成

早稲田大学本庄高等学院 非常勤講師

#### Abstract

This article reports on how to improve English grammar class in high school in terms of students' intellectual curiosity and grammar as a basis of communication tool. Although the latest Course of Study states that one of the objectives of English teaching is "to develop students' abilities to communicate through a range of expression (p. 89)", it is difficult to teach communicative grammar in high school as there are several problems in classroom situation: (1) the number of class per week, (2) the large amount of grammar items teachers have to deal with, and (3) lack of students' motivation toward grammar. I therefore changed some parts of the teaching procedure, such as time allotment, selection of grammar items to explain in class, and how to explain grammar items in light of the several problems which I thought should be improved in my English grammar class. By so doing, students appeared to get more interests in grammar than before and regard grammar as a basis of communication tool.

キーワード： 知的好奇心, コミュニケーションの基盤としての英文法

科目名	Oral Communication II (文法)
対象者とクラス人数	高校2年生 169名 (4クラス)
学習の目標	情報や自分の考えなどを適切に伝えられるように、適切な英文法の使用法を学ぶ。

#### 1. はじめに

本実践報告は、著者の勤務校での英文法の授業の現状を鑑み、問題点を見つけ、それら

への対応策を試みた実践を報告するものである。

## 2. 英文法の授業

高校の新学習指導要領（2009年公示、2013年試行）によると、外国語（英語）には以下の科目がある。

- ・コミュニケーション英語基礎
- ・コミュニケーション英語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ
- ・英語表現Ⅰ・Ⅱ
- ・英語会話

これらの科目は、文科省（2009）が目標として掲げている「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う（p. 87）」ために存在する。そして、教える内容は「生徒が情報や考えなどを理解したり伝えたりすることを実践するように具体的な言語の使用場面を設定して（p. 89）」言語活動を英語で行うことと明記されている。よって、英文法を学ぶなどという記述はない。

### 2.1 勤務校での英文法の位置づけ

上述したように、新学習指導要領には英文法の授業は科目として存在しないが、自分の気持ちを伝えるために文法は大変重要である（石黒 2009、小寺 2011、綿貫 2006）という事実から、著者の勤務校では英文法に特化した授業を週1時間設けている。著者は、今年度の高校2年生の英文法の授業を担当した。表1にその授業の詳細を示す。なお、この実践報告で取り上げる授業は、新学習指導要領の施行適用外となる高校2年を対象であるため、授業名は旧学習指導要領の Oral Communication となっている。

表1：Oral CommunicationⅡ（文法）

使用教科書	総合英語フォレスト（第6版）Extensive English Grammar in 47 Lessons
授業時数	週1時間（50分）
扱う範囲	第27章関係詞（4）～第47章接続詞（2）（pp. 60-101）

### 2.2 授業での問題点

英文法の授業を行なっていくうちに、多くの問題点が浮上した。その中でも、今回は3

## 英文法授業を改善するための一考察

点に絞って、授業の改善を試みた。

1点目は、学習者の知的好奇心を刺激できていないことである。従来の授業（表2）では、問題集を解く前に、その授業で学ぶ文法事項の基本的事項や重要事項を説明していた。しかし、多くの生徒にとって、既習の事項が多く、英文法への興味を削いでしまっている傾向が見られた。

2点目は、問題集ベースの授業になってしまうことである。新学習指導要領にもある通り、「情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う（p. 87）」ために、英文法を指導していくことが理想的である。しかし、授業時数や1回の授業で扱うべき学習範囲などの点を考慮すると、問題集を解き、その答え合わせと解説を行なうことに終始してしまう。

3点目は、コミュニケーションのために文法事項を学んでいないことである。勤務校の生徒の多くは、説明を受ければ問題集の英文の構造等を理解することができる。しかし、学んだ文法事項を利用して、情報や考えなどを適切に伝えるための練習をしていないので、スピーキングやライティングを行なう際に、学んだ文法の知識を活かしきれていない現状が見受けられた。

### 3. 実際の授業

今年度は、授業時数と試験範囲等のことを考慮し、授業1時間につき1章のペースで、表2に記した流れに沿って進めた。1学期から2・3学期で変更した点は（1）文法事項の説明、（2）答え合わせ&解説、そして（3）和文英訳の導入の3点である。

表 2：授業の流れ

改善前の授業（1学期）		改善後の授業（2・3学期）	
単語クイズ （約10分間）	単語帳のあらかじめ指定された範囲を小テストする。	単語クイズ （約10分間）	単語帳のあらかじめ指定された範囲を小テストする。
文法事項の説明 （約10分間）	授業で学ぶ文法事項の説明を行なう。	文法事項の説明 （約5分間）	授業で学ぶ文法事項の説明を行なう。
問題演習 （約15分間）	問題集にある練習問題を行なう。	問題演習 （約15分間）	問題集にある練習問題を行なう。
答え合わせ&解説 （約15分間）	近くの生徒と回答を交換し、お互いの回答の○付けを行なう。 その後、補足説明を行なう。	答え合わせ&解説 （約10分間）	近くの生徒と回答を交換し、お互いの回答の○付けを行なう。 その後、補足説明を行なう。
		和文英訳 （約10分間）	

### 3.1 文法事項の説明について

高校で行なう文法の授業では、多くの事項が中学校で既に勉強されている内容を復習し、さらに細かく学ぶことが多い。よって、多くの生徒にとっては、知っていることをもう一度聞くことになるので、時には退屈な授業内容になってしまう。そこで、中学校で学んだとされる事項に関しては、問題集にある補足説明や参考書を自分で確認しながら問題を解くよう指示した。復習を生徒自身に任せることによって、生徒自身が必要とする箇所のみ能動的に学習できるようにした。基本事項の説明の代わりに行なったことは、日本人が間違えやすい項目や、見落としがちな項目をクイズ形式で提示し、生徒に考えさせるようにした。これにより、自分で文法のことについて考えるようになり、意識が文法に向くようになると考えた。以下に実際の授業で行なった例を提示する。

例 1：省略の基本的原則を生徒へ落とし込む工夫

（1）以下の図を生徒へ表示して、「省略される前は、どのような文になっていたか考えてみよう」と、生徒に1分間考えさせる。その際に、複数人で考えさせるようにする。

## 省略 Ellipsis

- 慣用表現における省略
- 1) 日常会話における慣用的省略
- ① Sorry.
- ② Ready?
- ③ Nice to meet you.
- ④ Too bad.
- ⑤ No problem.
- ⑥ Sounds great.

(2) 何人かの生徒に答えを尋ねる。その後で、以下の答えを提示する。

## 省略 Ellipsis

- 1) 日常会話における慣用的省略
- ① **I am** Sorry!
- ② **Are you** Ready?
- ③ **It's** Nice to meet you.
- ④ **That[It]'s** Too bad.
- ⑤ **That would be** No problem.
- ⑥ **That** Sounds great.

## 可算名詞か不可算名詞か・・・

- 可算名詞＝数えられる名詞  
Ex) apple, day, family etc...

### 具体的な形がある名詞

- 不可算名詞＝数えられない名詞  
Ex) furniture, money, kindness etc...

### 具体的な形がない名詞

(3) 最後に、省略の基本的原則である「言わなくても、意味の伝達に支障のない単語は省略できる」ことを伝える。

例 2：可算名詞と不可算名詞の区別が大切であることを、生徒に落とし込む工夫

(1) 日本語と英語の名詞の違い、可算名詞と不可算名詞について次の図を用いて、簡略に説明する。

### 日本語と英語の名詞

Ex) 私は犬を1匹飼っています。

“I have a dog.”

私は犬を2匹飼っています。

“I have two dogs.”

日本語: 名詞の**数え方**に特徴がある。

英語: 名詞の**形**に特徴がある。

(2) 可算名詞と不可算名詞を間違えると、情報や考えを適切に伝えることができなくなるケースの英文を生徒同士で考えさせる。

「昨日鶏肉を食べた。」

I ate some chickens.

「昨日ニワトリを何匹かまるごと食べた。」

I ate some chicken.

「昨日鶏肉を食べた。」

例に挙げたような方法で生徒に文法事項を導入することで、問題点として挙げた「学習者の知的好奇心を刺激」できるよう試みた。なお、文法事項説明の際に参考にした英文法参考書は、「総合英語フォレスト（桐原書店）」、「デュアルスコープ総合英語（数研出版）」、「英文法解説（金子書房）」である。

### 3.2 解説について

英文法説明の時と同じように、生徒が既に理解している推測できる事項には、解説の時間を設けなかった。その代わりに、(1) 些細であるが理解しにくい事項と、机間巡視の際に多くの生徒が間違えている事項について解説を行なった。例えば、Plants need light in order that they may live. という英文を日本語に訳す問題に対しては、「in order that ~ という構文では、やや文語的ですが、may や might が使われます。この may や might は従来の推量ではなく、~するようにという意味になります」などと生徒に説明をした。解説

をした事項以外で、疑問がある生徒には、授業中や授業後の時間に対応した。このように解説の時間を短縮することにより、他の活動に時間を割けるように考慮した。

### 3.3 和文英訳について

授業で習った文法事項を適切に使えるようにするために、和文英訳を導入した。本来はコミュニケーション活動をするのが理想ではあるが、十分な時間が確保出来なかったり、文法事項によっては短時間で言語の使用場面を設定することが困難である場合があるので、本実践では和文英訳を行なった。

ここで扱う題材は、学んだ文法事項の中で、日本人が間違えやすい項目や明示的に知っておくと便利な項目などを含んでいるものを選んだ。なお、参考にした資料は、「減点されない英作文（学習研究社）」や「表現のためのロイヤル英文法（旺文社）」などである。

生徒はまず黒板にお題の和文と英訳の際に使われる英単語（熟語）を提示される。それらをまず3分間一人で英訳し、その後1分間他の生徒と英訳を見せ合う。そして、何人かの生徒を指名して、黒板に解答を書かせる。その解答を教師が添削するのだが、多くのことを一気に生徒に提示しても消化不良を起こしてしまうかもしれないので、まず押さえてほしいポイントの一つを提示して、その点から添削していく。そして生徒の英作文を添削しながら適宜コメントを入れて、最後に模範解答を提示する。以下に実際の授業で行なった例を提示する。

#### 例1 人を主語にできる形容詞かどうかを判断させるための和文英訳

和文「風に吹かれて自転車を走らせるときはそう快だ。」

提示した英単語：refresh, breeze

模範英文：You feel refreshed on a bicycle with a comfortable breeze on your face.

[It is refreshing to ride a bicycle feeling a comfortable breeze on the face.]

\*下線部は押さえてほしいポイント

#### 例2 副詞の置く位置に注意をさせるための和文英訳

和文「人生で重要なことは、すべて1人で決めなければならない。」

提示した英単語：for yourself

模範英文：You should decide for yourself about everything which is important in your life.

\*下線部は押さえてほしいポイント

## 4. まとめ

本実践報告は実験ではないので、結果的にどの程度生徒が英文法を正しく使えるようになったかなどの検証は行なっていない。しかし、今回の実践を行なっている中で、いくつかの生徒の変化に気付いた。

1点目に、英文法に関して新たな興味を示したことである。授業の冒頭に行なう文法説明では、生徒から「へえ〜」や「知らなかった」などの声が聞こえた。中学校で一通りの文法事項を学んだ学習者にとって、知的好奇心がくすぐられるような経験が文法学習でもあるということを知ってもらうことが出来た。さらに、和文英訳の添削の際に、「この表現はこのようなニュアンスがあるよ」とか「この表現はこのような場面だったらじっくりくるね」などのフィードバックをすることによって、授業後にも個人的に添削を求める生徒が増えてきた。自分の英語がどのように相手に伝わるかを生徒が少しずつ意識するようになり、能動的に授業に取り組んでいる姿勢が授業改善前より多く見受けられるようになった。

2点目に、英文法をコミュニケーションの基盤として捉える生徒が多く見受けられるようになったことである。授業改善前は、生徒から受ける質問の大半は、文法の分析的説明であった。しかし、授業改善後は、文法の分析的説明に加え、いつ、どのような場面で使用されることが多いのかなどの質問を受けるようになった。上述したように、和文英訳の際に、実際の使用場面を意識したコメントを行なうことにより、生徒にも「コミュニケーションのための英文法」という視点が生まれたのかもしれない。

英文法は自分の気持ちを伝えるために大変重要である(石黒 2009、小寺 2011、綿貫 2006)ので、英文法の授業は大変重要である。その重要な授業において、多くの制約のなか、いかに工夫をして「コミュニケーションの基盤としての英文法」を教えていくかは、今後考えていかなければならない課題であろう。

## 参考文献

Swan, M. (2005). *Practical English Usage*. New York, Oxford: Oxford University Press. Abraham.

石黒昭博 (監) (2009) 『総合英語 Forest (フォレスト)』 桐原書店.

江川泰一郎 (1991) 『英文法解説』 金子書房.

河村一誠 (2005) 『減点されない英作文』 学習研究社.

小寺茂明 (2011) 『デュアルスコープ総合英語』 数研出版.

文部科学省 (2009) 『高等学校学習指導要領』 87-92.

綿貫陽・マーク・ピーターセン (2006) 『表現のための実践ロイヤル英文法』 旺文社.